

幕末横浜居留地での英仏軍楽隊野外演奏曲目

笠 原 潔¹⁾

Concert Programs of English and French Military Bands at Yokohama Settlement in 1860s

Kiyoshi KASAHARA

ABSTRACT

English papers which were published in 1860s at Yokohama Settlement often run advertisements of open-air concerts held by English or French military bands. These advertisements tell us that, not only the works of classical composers such as Mozart and Rossini, but also those of more modern and contemporary composers such as Verdi and Johann Strauss II had already been performed at Yokohama in 1860s.

要 旨

1859（安政6）年の開港後、横浜居留地で刊行された英字新聞には、同居留地で英仏陸海軍楽隊が開催した野外演奏会の広告が時折掲載されている。それを通じて、我々は、当日どのような曲目が演奏される予定であったかを知ることができる。本稿では、1863年9月のイギリス海軍ユーリアラス号軍楽隊とフランス陸軍アフリカ軽装歩兵第3大隊軍楽隊の演奏会広告、1865年秋と1866年春のシーズンの英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊、ならびにそれに続く英国陸軍第9連隊第2大隊軍楽隊の演奏会広告を紹介する。それを通じて、1) 幕末の横浜では、ヴェルディやヨハン・シュトラウスのような同時代の作曲家の作品までもが既に演奏されていたこと、2) オペラの序曲や抜粋がプログラムの多くを占めていたこと、3) 当時ヨーロッパで初演されたばかりの作品が驚くほどの早さで横浜で演奏されていたことが分かる。

幕末の横浜には、各国の軍楽隊が渡来した。その中には、後述の英国海軍軍艦ユーリアラス号軍楽隊のように幕末の日本を訪れた軍艦に付属した海軍軍楽隊であれば、これも後述の幕末の横浜に駐屯した英仏陸軍軍楽隊のように陸軍部隊に付属したものもあった。

そうした軍楽隊が横浜居留地で開いた野外演奏会のうちのいくつかに関しては、当時横浜で出版されていた英字新聞に演奏会広告が掲載されている。それを通じて、当日、どのような曲目の演奏が予定されていたかが分かる。そうした広告に掲載された曲目は、幕末の横浜居留地でどのような西洋音楽が演奏されたかを知る上からばかりでなく、当時の西洋軍楽隊のレパートリーを知る上からも興味深い情報を伝えてくれる。

以下、当時、横浜で刊行された英字新聞に掲載された英仏軍楽隊の野外演奏会広告を紹介しながら、その演奏予定曲目を見ていこうと思う。

なお、以下に紹介する記事は、幕末の横浜居留地で開かれた英仏軍楽隊の野外演奏活動の全てを記したものではない。軍楽隊が野外演奏を行ったことが他の記録から確認される例は多数ある。幕末の横浜では、英字新聞の発刊・廃刊が相次いだ。したがって、以下の記録は、軍楽隊の野外演奏会の開催が新聞の発刊時期とたまたま重なったものだけが記録として残されたと見るべきであり、さらに言うならば、新聞に広告が掲載されたものだけが記録として残ったと見るべきである。

そうした制約はあるにせよ、これらの記録を通じて、当時、横浜居留地で開催された軍楽隊の野外演奏会のレパートリーのおおよその傾向を掴むことができるであろう。

¹⁾ 放送大学助教授（「人間の探究」専攻）

〔凡例〕

1. 出典となった、横浜居留地で刊行された英字新聞のタイトルは、以下の略号で示す：

JH=*The Japan Herald*

JTDA=*The Japan Times' Daily Advertiser* (日刊。後継紙：JTDA & YB)

JTDA & YB=*The Japan Times' Daily Advertiser & Yokohama Bell* (日刊。JTDAの後継紙)

JT=*The Japan Times* (JTDA/JTDA & YBの姉妹紙。週刊)

以上のいずれも、『日本初期新聞全集』、第1～8巻、第11巻、ベリかん社、1987～1988年に所収されている。

2. 各号の日付等は、たとえば*The Japan Times' Daily Advertiser*紙第1巻第1号1865年9月13日号の場合は、JTDA, Vol. 1 No. 1, 1865/9/13のように略記する。

3. 各作曲家や作品に関しては、主として*The New Grove Dictionary of Music and Musicians*をはじめとして、種々の音楽事典を参照した。

I. ユーリアラス号軍楽隊演奏会広告

管見によれば、幕末の横浜で刊行された英字新聞に掲載された西洋軍楽隊の野外演奏会広告で最も古いものは、1863(文久3)年9月12日付の「ジャパン・ヘラルド」(JH)紙に掲載された英国海軍軍艦ユーリアラス号軍楽隊とフランス陸軍アフリカ軽装歩兵第3大隊軍楽隊の演奏広告である。

ユーリアラス号軍楽隊の演奏広告は、以下のように書かれている。

THE BAND of Her Majesty's Ship "Euryalus" with the kind permission of Vice Admiral Kuper, C. B., will perform.

On the Bund

Between the hours of 3 & 5 o'clock

On Monday the 14th inst.

the following,

PROGRAMME

- | | | | |
|---|-----------|----------------------|----------|
| 1 | Overture | "William-Tell" | Rossini. |
| 2 | Selection | "I Lombardi" | Verdi. |
| 3 | Valse | "Reigning Beauty" | d'Albert |
| 4 | Selection | "Il Bar. di Seville" | Rossini. |
| 5 | Quadrille | "Severn" | Mutton. |
| 6 | Duette | "Nabucco" | Verdi. |
| 7 | Gallop | "Kagosima" | Tesea. |

英国海軍軍艦「ユーリアラス号」軍楽隊は、バス勲章佩綬者クーパー中將¹のご厚意により、横浜海岸通り(the Bund)で、来る14日、月曜日、3時から5

時の間、下記の曲目を演奏します。

プログラム

- | | | |
|----------|-------------------------|-------|
| 1. 序曲 | 《ウィリアム・テル》 | ロッシーニ |
| 2. 抜粋 | 《第1回十字軍のロンバルディア人
たち》 | ヴェルディ |
| 3. ワルツ | 《美しき女性統治者》 | ダルベール |
| 4. 抜粋 | 《セヴィリヤの理髪師》 | ロッシーニ |
| 5. カドリール | 《セヴァン川》 | マットン |
| 6. 二重唱 | 《ナブッコ》 | ヴェルディ |
| 7. ギャロップ | 《カゴシマ》 | テシー |

(JH, No.81, 1863/9/12)

1863年9月14日開催予定の演奏会広告である。

曲目中、ロッシーニ(1792～1868)の歌劇《ウィリアム・テル》(1829)と《セヴィリヤの理髪師》(1816)、ヴェルディ(1813～1901)の歌劇《第1回十字軍のロンバルディア人たち》(1843)と《ナブッコ》(1842)に関しては、説明の要はないであろう。現在でも世界中の歌劇場で上演され続けている傑作である。ただし、ヴェルディは、幕末の日本で演奏されたオペラ作曲家の中では、比較的若い世代に属する。

《ナブッコ》の二重唱は、第3幕第1場で歌われるナブッコとアビガイルの二重唱を指すと思われる。オペラでは、この後、有名な「行け、我が思いよ、金色の翼に乗って」の合唱が歌われる。このオペラが作曲された当時、イタリアは、オーストリアとスペイン両国が支配する地域をはじめ、教皇領やその他の独立領に分断されていて、イタリア統一が国民の悲願となっていた。そうした状況の下で1842年にこのオペラが初演された直後から、この合唱曲は、祖国への熱い思いを歌ったその内容から、イタリア国民の愛国歌となり、イタリア統一運動のシンボルとなった。その運動は、やがて1848年のイタリア革命、さらにはガリバルディ(1807～1882)によるイタリア統一戦争へと発展し、ついには1861年のイタリア王国建国へと結びついた。横浜で、この曲が演奏された2年前のことである。そうしたことを考えると、当日は、《ナブッコ》第3幕第1場の二重唱の締めくくりに、この合唱曲が軍楽隊によって演奏された気がしてならない。

なお、後年、ヴェルディが亡くなった時、数万人におよぶイタリア国民が、トスカニーニの指揮によってこの合唱を歌い、ヴェルディの遺体を見送ったという。

第3曲の作曲者は、大ピアニストのユージン・ダルベール Eugene D'Albert (1864～1932)の父シャルル・ルイ・ナポレオン・ダルベール Charles Louis Napoléon D'Albert (1809～1886)を指すと思われる。彼は、若い頃、パリでバレエ音楽に携わった後、ロンドンに渡り、キングス・シアターやコヴェント・ガー

1 クーパー提督の名前は、日本では伝統的に「キューパー」と表記されてきたが、本稿では、中武 1998その他の文献に倣い、「クーパー」と表記する。

デンでダンス・マスターを務めるかたわら、多数の舞踏曲を作曲した。《美しき女性統治者》という題名は、時のイギリス国王ヴィクトリア女王(在位1837~1901)に言及したものと思われる。

第5曲のタイトルは、誤って“Quadrille”と印刷されているが、正しくは“Quadrille”である。“Severn”は、ウェールズ中部に源を発し、ウースターを通過して、ブリストル海峡に流れ込む川の名前。作曲者のマットンに関しては、未詳である。

第7曲にはギャロップ《カゴシマ》なる曲名が挙げられている。実は、ユーリアラス号を旗艦とするイギリス艦隊は、前月(1863年8月=文久3年7月)、クーパー提督の指揮の下、生麦事件でリチャードソンを殺害した犯人の引き渡しと賠償金の支払いを求めて鹿児島湾に侵入し、薩摩藩との間で砲撃戦を行ってきたばかりであった(いわゆる「薩英戦争」)。このギャロップは、それを題材にして作られた曲であろう。おそらくは、砲撃音を模した太鼓の音などが随所に聞かれる、一種の戦争音楽であったと思われるが、その辺りのことは、楽譜が未発見のために、不明である。そうした状況に鑑みると、作曲者のテシーなる人物はユーリアラス軍楽隊メンバーの一人ではなかったかと想像されるが、その辺りの状況も未詳である。

演奏に当たったユーリアラス号軍楽隊の人数や楽器編成などは未詳である。

なお、ちょうどこの演奏会が行われた頃の横浜居留地を写したパノラマ写真がある(横浜開港資料館(編)2006:18-23)。

II. フランス陸軍アフリカ軽装歩兵第3大隊軍楽隊演奏会広告

《ジャパン・ヘラルド》紙の同日号には、フランス陸軍アフリカ軽装歩兵第3大隊軍楽隊が開催する野外演奏会の広告も掲載されている。同大隊は、前年の文久2(1862)年8月に起こった生麦事件の余波で横浜居留地を巡る情勢が緊迫してきたため²、居留地保護を名目に、この年から駐留を開始したものである。公使館警備のため1862年8月にすでに派遣されていた分遣隊20名に加えて、1863年6月18日に先遣隊25名がタンクレード号で、次いで数日後にデュプレックス号で50名が派遣され³、7月10日にはモンジュ号で208名が横浜に到着し(中武 1996:46-50)、山手居留地185番・186番に駐屯した。今日の横浜・山手の「港の見える丘公園」の地続きの山(通称「フランス山」)からその山下にかけての地域である。今日の谷戸坂脇の地域に当たる。

上陸直後、兵舎設営のため、樹木を切り倒し、塹壕

を掘る際に、兵士たちが《市場の星》L'Etoile du Bazarという歌を歌いながら作業していたところ⁴、作業を手伝うために徴発された日本人夫たちがヤンヤの喝采を送り、あげくのはてに日本人たちも「レトラ・ディ・バザ、レトラ・ディ・バザ」L'étola di bazâlと歌いながら作業を手伝ったという逸話が残されている(アンベール 1970:350)。《市場の星》というのは、フランスの軍歌と思われるが、未詳である。

横浜に駐屯したアフリカ軽装歩兵第3大隊の員数は、1863年7月の時点で、約310名と、最多に達した。その後、若干の兵員の移動があり、9月2日の時点で261名、9月末の時点では197名となったという(中武 1996:50-52)。1863年9月17日に開催された演奏会は、ちょうどこの中間の時期に行われたことになる。

演奏会広告は、英文で以下のように記されている。

THE BAND of the “3rd Bataillon Leger d’Afrique” will Perform,

On the Bund

Near the New Hatoba

from half-past six to half-past seven o'clock in the afternoon.

On Thursday, the 17th. inst.

- | | | |
|---|--------------------|---------------|
| 1 | “Fra-Diavolo” | Pas Redoublé |
| 2 | “Elisa” | Valse |
| 3 | “Bolero” | ク |
| 4 | “Le Roi de Rome” | Marche |
| 5 | “Une Nuit Blanche” | Polka Mazurk. |

アフリカ軽装歩兵第3大隊軍楽隊は、来る17日、木曜日、午後6時30分から7時30分まで、横浜海岸通り、新波止場寄りで、演奏を行います。

- | | | |
|----|------------|----------|
| 1. | 《フラ・ディアボロ》 | パ・ルドゥーブレ |
| 2. | 《エリザ》 | ワルツ |
| 3. | 《ボレロ》 | 同 |
| 4. | 《ローマ王》 | 行進曲 |
| 5. | 《白夜》 | ポルカ・マズルカ |
- (JH, No.81, 1863/9/12)

当時、横浜には、二つの波止場があった。

一つは、1854年のペリー艦隊第2回来航時に、今日の神奈川県庁の地に建てられた仮応接所で日米交渉を行うために土嚢を積み上げた仮棧橋の跡地に、1859(安政6)年の横浜開港に備えて、1858(安政5)年に構築された波止場で、「イギリス波止場」「西波止場」「旧波止場」などと呼ばれた。1866(慶応2)年の横浜大火後、波止場の延長工事がなされた際、波除けの

2 英仏陸軍部隊が横浜に駐屯するようになった経緯に関しては、影山 1999を参照のこと。

3 この50名は、モンジュ号で到着した、と一般に言われてきたが、中武香奈美によれば、デュプレックス号で到着したとするのが正しいという(中武 1996:68、注30)。

4 アフリカ軽装歩兵隊の多くは、土工兵が占めていた(中武 1996)。この記録は、それと関係するものであろう。

ために突堤の先が曲げられたため、「象の鼻」という異名も持つようになった（横浜開港資料館1988：76-77）。今日の横浜大根橋はその後身であるが、棧橋拡張が繰り返された結果、場所は多少移動している。

もう一つは、横浜居留地10番（現在の横浜ニューグランド・ホテルの地）から13番（マリントワーの辺り）の前面に文久年間に築造され、1864（元治元）年から一般に使用が開始された波止場で、こちらは「フランス波止場」「東波止場」「新波止場」などと呼ばれた（横浜開港資料館1988：76）。アフリカ軽装歩兵第3大隊軍楽隊の演奏が行われた「横浜海岸通り、新波止場寄り」とは、この波止場の付け根にあたる海岸通り沿いの地点を指すものであろう。フランス陸軍駐屯地の近くに位置するところから、演奏場所選ばれたものと思われる。ただし、この時点では、波止場の運用はまだ開始されていなかったはずである。

これに対して、先に紹介した英国海軍軍艦ユーリアス号軍楽隊や、この後紹介する英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊および第9連隊第2大隊軍楽隊の演奏場所は、「横浜海岸通りthe Bund」としか記述されておらず、「横浜海岸通り」のどこで演奏されたのかは明らかでない。筆者は、運上所（現、神奈川県庁）と御役宅（現、横浜開港資料館）と横浜居留地1番（いわゆる「英国1番」。現、シルクセンター）に挟まれた横浜海岸通り沿いの地点（現在の横浜開港資料館の前面あたり）、つまり、ちょうど「イギリス波止場」の付け根部分のあたりではなかったかと想像している。ここにはちょっとした空間があり、多数の聴衆が集まるのに便利であったと思われるからである。

アフリカ軽装歩兵第3大隊軍楽隊の演奏会プログラムで1曲目に挙げられた《フラ・ディアボロ》は、フランス初期ロマン派オペラの巨匠ダニエル・フランソワ・エスプリ・オーベール Daniel François Esprit Auber（1782～1871）の歌劇（1830）で、現在でも、世界各地の歌劇場で上演されている。日本では、1865（慶応元）年2月13日に、横浜のロイヤル・オリンピック劇場（後述）で、イギリス軍兵士たち（後述の英国陸軍第20連隊第2大隊の有志たちであろう）によって上演されている（升本 1986：206）。アフリカ軽装歩兵第3大隊軍楽隊が演奏したのは、このオペラの中の旋律をバレーに使われる「パ・ルドゥーブレ」風に編曲したものであろう。

他の4曲は、作曲者名が記されていないために、特定できない。

なお、アフリカ軽装歩兵第3大隊は、1864年6月23日までに横浜から完全撤退し、以後のフランス軍による横浜警備は、フランス海軍海兵隊に引き継がれた。

Ⅲ. 英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊演奏会 広告（1865年秋シーズン）

フランスに続いて、イギリスも、居留地保護のため、1864（元治元）年に英国陸軍第20連隊第2大隊を横浜に派遣してきた。1月22日に、まず、分遣隊2個中隊161名が到着し、山手居留地115番（今日の「港の見える丘公園」）から116番（「港の見える丘公園」の後背地。現在、岩崎博物館、横浜インターナショナルスクール、山手資料館、山手聖公会教会などが建つ）にかけての地域で兵舎の設営を開始した（中武 1994）。この辺りは、今日、「トワソテ山」と呼ばれているが、「トワソテ」とは、英語の20（twenty）が訛ったものである。

7月9日には、本隊6個中隊、約800名が到着した（中武 1994）。一行を乗せた艦が入港する際、軍楽隊が《いづこも我が故郷》Everyland's my homeを演奏したことが記されている（デーヴィス 1993：99）が、この曲に関しては未詳である。一行は、検疫のため、6日間を艦上で過ごした後、7月15日に上陸し、兵舎に入った⁵。

英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊の野外演奏会広告が新聞に掲載されるようになったのは、1865（慶応元）年9月からである。ちょうどこの年、「ジャパン・タイムズ・デイリー・アドヴァンタイザー」紙（JTDA。日刊）とその姉妹紙である「ジャパン・タイムズ」紙（JT。週刊）が創刊され、そこにこの軍楽隊の演奏会広告が掲載されるようになったのである。

この部隊が横浜に駐屯して以来、同様の野外演奏会は、1864（元治元）年の秋シーズンならびに1865（慶応元）年の春シーズンにも行われていたものと思われるが、この時点では「ジャパン・タイムズ・デイリー・アドヴァンタイザー」紙や「ジャパン・タイムズ」紙は発刊されておらず、他の新聞やその他の記録にも記載がないため、詳細は不明である。

「ジャパン・タイムズ・デイリー・アドヴァンタイザー」紙の1865年9月13日号（創刊号）および9月14日号、ならびに「ジャパン・タイムズ」紙の9月15日号には、下記のような演奏会広告が載せられた。1865年9月15日（金）に開かれたこの演奏会は、この年の秋の演奏会シーズンの幕開けを告げる、最初の演奏会であったと思われる。広告の紙型は同一のものを使用しているが、後の号では誤植が訂正されている。

By the kind permission of Colonel Browne and Officers the Band of H. M.'s 2d Batt. 20 Regt. will play,

5 デーヴィスは、「木造の小屋からなる兵舎」と記している（デーヴィス 1993：99）、陸軍用の兵舎はすでに完成していたことが分かるが、これに先立つ6月7日に到着した英国海兵大隊用の兵舎はまだ完成していなかったことが、上陸の模様を記した副官ポイントの回想録に「鼓笛隊を先頭にわれわれのこれからの野営地へ行進した」（柳生 1999：125）と書かれていることから判明する。海兵大隊用の兵舎は、大隊が英米仏蘭四カ国連合艦隊に同行し、下関砲撃後、上陸して長州藩の砲台を破壊した、いわゆる「下関戦争」に出兵している間に完成したという（柳生 1999：137）。

weather permitting, on the Bund on Friday next at 5.30 P.M.

PROGRAMME

- | | | | |
|---|-----------|-------------------|-----------|
| 1 | Quadrille | Campbell Minstrel | D'Albert |
| 2 | Aria | Martiana | Wallace |
| 3 | Valse | Satanella | Laurent |
| 4 | Selection | Don Pasquale | Donizetti |
| 5 | Polonaise | Faust | Gounod |

God Save the Queen

A. HENNESSY

Conductor

ブラウン大佐〔大隊長〕ならびに士官の方々のご厚意により、英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊は、天候が許す限り、次の金曜日〔9月15日〕、午後5時30分から、横浜海岸通り (the Bund) で演奏を行います。

プログラム

- | | | |
|----------|-----------------|--------|
| 1. カドリール | 《キャンプベル・ミンストレル》 | ダルベール |
| 2. アリア | 《マルティアーナ》 | ウォーリス |
| 3. ワルツ | 《サタネッラ》 | ローレント |
| 4. 抜粋 | 《ドン・パスクワレ》 | ドニゼッティ |
| 5. ポロネーズ | 《ファウスト》 | グノー |
| | 《神よ、女王を守らせてまえ》 | |

A. ヘネシー

指揮者

(JTDA, Vol. 1 No. 1, 1865/9/13, JTDA, Vol. 1 No. 2, 1865/9/14, JT, No. 2, 1865/9/15)

JTDA, Vol. 1 No. 1, 1865/9/13では文中の「軍楽隊 the Band」という言葉が抜けていたが、その後の2号で補われた。

1曲目の《キャンプベル・ミンストレル》は、後に紹介する1866年5月11日開催の演奏会の広告では、《キャンプベル・ミンストレルズ》Campbell Minstrelsと複数形で記されている。作曲者のダルベールについては、先述した。

2曲目の作曲者ウィリアム・ヴィンセント・ウォーリス William Vincent Wallace (1812~1865) は、アイルランド出身のヴァイオリニスト兼作曲家。代表作《マルティアーナ》(1845) は、彼の最初のオペラ作品である。

3曲目のワルツ《サタネッラ》に関しては、未詳。ただし、次週の演奏会プログラムにバルフ Balfe の歌劇《サタネッラ》からのアリアが載っている。両者は、同名異曲の可能性もあるが、ローレントのワルツ《サタネッラ》はバルフの歌劇《サタネッラ》の中の旋律をワルツに編曲したものかもしれない。当時は、そうしたことがしばしばあり、例えば「ワルツ王」ヨハン・シュトラウス2世 (1825~1899) のカドリールの中にも、バルフやフロトウ、マイヤーベーアやヴェルディの歌劇の旋律を編曲したものが多数あり、いずれ

もヨハン・シュトラウス2世の名前で発表されている。この広告に、ローレントの名前が作曲者として挙げられているのは、それに準じた措置ではなかろうか。

4曲目の作曲者として挙げられたガエターノ・ドニゼッティ Gaetano Donizetti (1797~1848) は、いうまでもなく、イタリア初期ロマン派歌劇の巨匠。1843年にパリの「イタリア座 Le Théâtre Italien」で初演された《ドン・パスクワレ》は、現在でもしばしば上演されている。明治20 (1887) 年2月19日に行われた「音楽取調掛生徒卒業式並演奏会」では、「卒業生一同・生徒一同」が「唱歌 セレネード オブ ドンパスクェル (ドニゼッティ作)」を歌っている。

5曲目の作曲者シャルル・フランソワ・グノー Charles François Gounod (1818~1893) は、これもうまでもなく、フランス・ロマン派オペラの巨匠。ゲーテの『ファウスト』第1部に基づく歌劇《ファウスト》は1859年、パリの「テアトル・リリック Le Théâtre Lyrique」で初演された。初演後6年目にして、横浜でその抜粋が演奏されたことになる。ただし、グノーの歌劇《ファウスト》に「ポロネーズ」はない。おそらくは、第3幕で演奏されるバレエ曲のうちのどれかをポロネーズ風に編曲したものであろう。

最後に、英国国歌《神よ、女王を守らせてまえ (ゴッド・セーブ・ザ・クイーン)》で演奏会を閉じるのは、英国陸軍軍楽隊としては、当然のことである。

末尾に、指揮者としてA. ヘネシーの名前が挙げられている。

筆者は、横浜駐屯中の英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊の姿が写った写真を1枚だけ知っている (図1)。イギリス海兵隊中尉W. J. バーカー (W. J. Barker) 旧蔵のアルバム (J. Prothero-Thomas蔵) に収められた写真で、26名ほどの軍楽隊員が輪になって演奏している様子が遠景に小さく写っている (横浜対外関係史研究会・横浜開港資料館 (編) 1999: 18)。鼓手とトロンボーン奏者の姿は確認できるが、その他の楽器編成は、隊員たちの姿が小さく写っているのと、隊員の過半数がカメラに背を向けているために、同定困難である。

英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊による野外演奏会は、この後、10月末まで、毎週末、金曜日から土曜日の夕方に行われた。会場は、いずれも「横浜海岸通り the Bund」である。その広告文は、上記の1865年9月15日の演奏会の広告文の「金曜日にon Friday」の個所が「土曜日にon Saturday」「明日tomorrow」「今日today」のように変わり、また開始時刻が変更になるだけなので、以下、日付と演奏開始時刻、それに演奏曲目のみ記す。

1865年9月22日 (金) 午後5時30分より

- | | | | |
|---|-----------|---------------|-----------|
| 1 | Aria | Satanella | Balfe |
| 2 | Quadrille | Zurich | D'Albert |
| 3 | Polka | Carabineer | Godfrey |
| 4 | Selection | Les Huguenots | Meyerbeer |

5 Valse Wiener Kinder Strauss
God Save the Queen

1. アリア 《サタネッラ》 バルフ
2. カドリール 《チューリッヒ》 ダルベール
3. ポルカ 《カービン銃手》 ゴドフリー
4. 抜粋 《ユグノー教徒》 マイヤーベアー
5. ワルツ 《ウィーンっ子たち》 シュトラウス
《神よ、女王を守らせたまえ》

(JTDA, Vol. 1 No. 8, 1865/9/21, JTDA, Vol. 1 No. 9, 1865/9/22)

1 曲目の作曲者マイケル・ウィリアム・バルフ Michael William Balfe (1808~1870) は、アイルランド出身の歌手兼オペラ作曲家。代表作《ボヘミアン・ガール The Bohemian Girl》などを通じて、英語オペラを確立したことで知られる。歌劇《サタネッラ》は1858年初演であるから、これも比較的新作の類に入る。

2 曲目の曲名は、ウムラウトが欠けている。正しくは、“Zürich”である。作曲者ダルベールについては、先述した。

3 曲目の作曲者ゴドフリーは、軍楽隊一家として知られるゴドフリー族のうちの誰か、すなわち、父のチャールズ Charles Godfrey (1790~1863) か、長男のダニエル Daniel (1831~1903) か、次男のアドルフラス・フレデリック Adolphus Frederick (1837~1882) か、三男のチャールズ2世 Charles II (1839

~1919) のうちの誰かではないかと思われる。おそらくは、長男のダニエル（通称、ダン）の作品ではなかろうか。カービン銃は、馬上射撃用に銃身を短くし、背負いやすいように、環（カラビナ）を付けたライフル銃のことをいうから、曲名は「騎銃手」と訳してもよいかもしれない。

なお、明治4（1871）年から明治6（1873）年まで欧米各国を訪れたいわゆる「岩倉使節団」（岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文ら）は、1872（明治5）年6月18日にボストンでダン・ゴドフリーの指揮を聴いている（中村洪介 1987/2002：72-73）。同じ演奏会には、ヨハン・シュトラウス2世も登場している。

4 曲目のジャコモ・マイヤーベアー Giacomo Meyerbeer (1791~1864) は、いうまでもなく、ドイツ出身の初期ロマン派オペラの巨匠。ドイツとイタリアで活躍した後、パリに定住した。1836年にパリのオペラ座で初演された《ユグノー教徒》は、現在でも上演され続けている。

5 曲目は、「ワルツ王」ヨハン・シュトラウス2世の弟のヨーゼフ・シュトラウス Josef Strauss (1827~1870) の作品（1858年）。繊細な作風で知られ、その作品は、現在でもウィーン・フィルハーモニーのニューイヤー・コンサートなどを通じて広く親しまれている。幕末の横浜での野外演奏会記録に最初に登場するのが、父ヨハン・シュトラウス1世（1804~1849）の作品でもなく、「ワルツ王」ヨハン・シュトラウス2世の作品でもなく、弟のヨーゼフの作品であることにはいささか驚かされる。

1865年9月30日（土）午後4時30分より

- | | | | |
|---|-----------|--------------------|----------|
| 1 | Overture | Die Zauberflöte | Mozart |
| 2 | Quadrille | Minstrel's Songs | Kuhner |
| 3 | Valse | Song of the Wood | Tinney |
| 4 | Selection | Fra Diavolo | Auber |
| 5 | Galop | Submarine | D'Albert |
| | | God Save the Queen | |

- | | | |
|----------|----------------|--------|
| 1. 序曲 | 《魔笛》 | モーツァルト |
| 2. カドリール | 《ミンストレルの歌》 | クーナー |
| 3. ワルツ | 《森の歌》 | ティニー |
| 4. 抜粋 | 《フラ・ディアヴォロ》 | オーベール |
| 5. ギャロップ | 《潜水艇》 | ダルベール |
| | 《神よ、女王を守らせたまえ》 | |

(JTDA, Vol. 1 No. 13, 1865/9/27, JTDA, Vol. 1 No. 14, 1865/9/28, JT, No. 4, 1865/9/29)

この日の演奏会は、それまでの演奏会に比べて、開始時刻が1時間繰り上がっている。秋分の日を過ぎて夕暮れが早まり、気温が低下し始める時刻が早くなることに加えて、暗くなると攘夷派浪士に襲われる危険が高まることに備えたものであろう。

この日の演奏会では、モーツァルト（1756~1791）

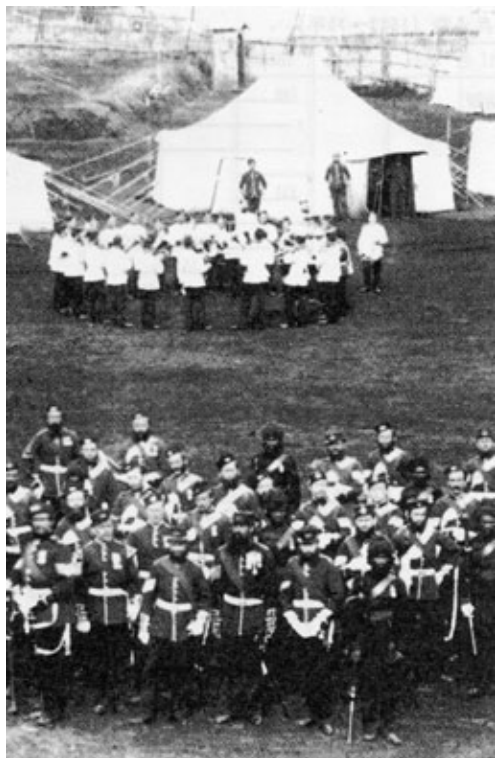


図1

の歌劇《魔笛》（1791）の序曲が最初に演奏されている。管見の限りでは、これが、日本でモーツァルトの作品が演奏された最初の記録である。広告文ではウムラウトが欠けている。正しくは、“Zauberflöte”である。

2曲目のクナーの《ミンストレルの歌》は未詳。この作曲家については、10月27日の演奏会の項で取り上げる。

3曲目のティニーのワルツ《森の歌》も未詳。

4曲目のオーベールの歌劇《フラ・ディアボロ》（1830）については、フランス陸軍アフリカ軽装歩兵第3大隊軍楽隊の演奏広告の個所で触れた。

5曲目の作曲者ダルベールについては、先述した。曲名は、JTDA, Vol. 1 No. 13, 1865/9/27と、JTDA, Vol. 1 No. 14, 1865/9/28では、“Sumnarine”と綴られていたが、JT, No. 4, 1865/9/29で“Submarine”と改められたので、今、それに従う。潜水艇は、アメリカ独立戦争中に考案され、この演奏会に先立つアメリカ南北戦争（1860～1864）でも戦闘に使われたから（といっても、当時の潜水艇は、まだ、幼稚なものであったが）、このギャロップは、そうした新兵器に取材した作品ではないかと思われる。

1865年10月6日（金）午後4時より

1	Overture	Le Lac des Fees	Auber
2	Quadrille	Love's Ransom	Van Mannen
3	Valse	Marie Wilton	Van Mannen
4	Selection	Martha	Flotow
5	Galop	Jockey	Godfrey
		God Save the Queen	

1. 序曲	《妖精の湖》	オーベール
2. カドリール	《愛の代償》	ファン・マネン
3. ワルツ	《マリー・ウィルトン》	ファン・マネン
4. 抜粋	《マルタ》	フロトウ
5. ギャロップ	《ジョッキー》	ゴドフリー
	《神よ、女王を守らせてまえ》	

(JTDA, Vol. 1 No. 17, 1865/10/4, JTDA, Vol. 1 No. 18, 1865/10/5, JTDA, Vol. 1 No. 19, 1865/10/6, JT, No. 5, 1865/10/6)

演奏開始時刻は、JTDA, Vol. 1 No. 17, 1865/10/4では午後4時30分からと予告されていたが、JTDA, Vol. 1 No. 18, 1865/10/5以降の号では「午後4時 at 4 P.M.」と訂正された。先に述べたように、日暮れが早まったことに伴う措置であろう。

1曲目の作曲者オーベールについては、先述した。歌劇《妖精の湖》は、1839年の作品。広告文では、アクサンが欠けている。正しくは“Le Lac des Fées”である。

2曲目、3曲目に関しては、未詳。ただし、後述の1866年4月7日に横浜のロイヤル・オリンピック劇場

で行われた演奏会の第2部第6曲として歌われた《夏の夜の星々》の作曲者ジョン・リプトロット・ハットン John Liptrot Hatton (1808～1886) に、《薔薇、または愛の代償 Rose, or Love's Ransom》というオペラ（1864）があるので、2曲目は、ハットンのオペラ《薔薇、または愛の代償》の中の旋律をファン・マネンなる人物がカドリールにまとめたものかもしれない。

4曲目は、ドイツ・ロマン派のオペラ作曲家フリードリヒ・フロトウ Friedrich Flotow (1812～1883) のドイツ語歌劇《マルタ》（1847）からの抜粋である。日本でも、戦前から親しまれてきたオペラである。

このオペラは、日本では、三つの曲で有名である。

第1は、劇中で盛んにアイルランド民謡「夏の名残りのバラ The Last Rose of Summer」が歌われることである。この民謡は、日本では、明治17（1884）年3月に刊行された『小学唱歌集第三編』で、「菊」の題名の下、日本語歌詞が付けられた。題は後に「庭の千草」と改められ、現在では一般に後者の題名で親しまれている。明治18（1885）年7月20日に開催された「音楽取調所卒業演奏会」で「フンテン作」の「洋琴連奏曲ラスト・ローズ・オブ・サンマー」を幸田延女と遠山甲子女が連弾している。「フンテン」なる人物は、編曲者を表すものかと思われる。

第2は、第3幕で主人公ライオネルが歌うアリア「ああ、かくも気高く Ach so fromm, ach so traut」である。このアリアは、日本では、浅草オペラのスターであった田谷力三（1899～1988）の歌唱を通じて、「君が姿みし日より」の題名で（「あはれ、うるわしき君が姿みし日より」）、あるいは「乙女」（「夢のごとく、うるわしき乙女に」）、さらにはイタリア語訳名の「マッパリ」の名前で親しまれてきた。

第3は、第1幕第2場で農民の男女が歌う合唱である。この歌は、戦前から戦後にかけて、「爺さん、酒呑んで酔っぱらって死んじゃった。婆さん、それ見てビックリして死んじゃった」といった歌詞を付けて子供たちの間で歌われていたという。フロトウの《マルタ》は、戦前、浅草オペラで上演されたほか、日比谷野外音楽堂で行われた帝国陸・海軍軍楽隊の演奏会でもその抜粋がさかんに演奏されたというから、やがて、この旋律が、替え歌歌詞を伴って、子供の文化にまで侵入するに至ったのであろう。幕末の日本に紹介された洋楽レパートリーが明治時代以降の日本の洋楽文化に受け継がれ、ついには子供たちの世界にまで浸透していったことを示す例である。

なお、明治に入ってから、鹿鳴館で、西洋のダンスの教習が、華族や貴族たち——特にその子女たち——を対象に開始された際、最初に教えられた「コチロン」（正しくは、フランス語で「コティヨン」Cotillon）という曲は、実は《マルタ》第1幕第2場で歌われるこの農民たちの合唱であったという。鹿鳴館に集った貴族・華族たちは、「爺さん、酒呑んで」のメロディーで「コティヨン」を踊っていたのである。

第5曲の作曲者ゴドフリーに関しては、9月22日の演奏会の項を参照されたい。

1865年10月14日（土）午後4時より

- | | | | |
|---|--------------------|--------------|-----------|
| 1 | Overture | I Martiri | Donizetti |
| 2 | Quadrille | La Normandie | D'Albert |
| 3 | Valse | Il Bacio | Arditti |
| 4 | Selection | Bianca | Balfe |
| 5 | Mazurka | Veronika | Faust |
| | God Save the Queen | | |
-
- | | | |
|----------|----------------|--------|
| 1. 序曲 | 《殉教者たち》 | ドニゼッティ |
| 2. カドリール | 《ノルマンディー娘》 | ダルベール |
| 3. ワルツ | 《接吻》 | アルディティ |
| 4. 抜粋 | 《ピアンカ》 | バルフ |
| 5. マズルカ | 《ヴェロニカ》 | ファウスト |
| | 《神よ、女王を守らせてまえ》 | |

(JTDA, Vol. 1 No. 23, 1865/10/11、JTDA, Vol. 1 No. 24, 1865/10/12)

1曲目の曲名は、JTDA, Vol. 1 No. 23, 1865/10/11では“J. Martiri”、JTDA, Vol. 1 No. 24, 1865/10/12では“I. Martiri”と綴られているが、ドニゼッティのフランス・オペラ《殉教者たち Les Martyrs》の題名をイタリア語で表記したものである。正しくは、“I Martiri”となる。1840年に、パリ・オペラ座で初演された作品である。

2曲目の作曲者ダルベールについては、先述した。

3曲目の作曲者ルイジ・アルディティ Luigi Arditi (1822~1903) は、イタリア出身の作曲家・指揮者で、欧米各地で活躍した後、ロンドンで帝国劇場の指揮者となり、同時に、歌唱付きのワルツの作曲家として活躍した。《接吻 Il Bacio》は、その代表作であるが、その旋律は、今日でもしばしば耳にする。この旋律が、幕末の横浜ですでに演奏されていたとは、ちょっと驚かされる。

4曲目に抜粋が演奏されたバルフのオペラ《ピアンカ》は、1860年の作。初演後5年目に早くも日本で演奏されたことになる。

5曲目の作曲者ファウストは、ドイツの軍楽隊長カール・ファウスト Karl Faust (1825~1892) のことと思われる。明治16年10月に宮内省式部寮雅楽課（現、宮内庁楽部）の伶人たちがエッケルトから「フワウスト氏作」の《薄暗躍楽（デンメルリヒトワルス）》の伝習を受け、明治18（1885）年7月20日に開催された「音楽取調所卒業演奏会」では、エッケルトの指揮の下、「本所生徒職員」が「フォースト氏作」の欧州管弦楽「テレセン、ワルツ」なる曲を演奏したという（中村洪介 2003：482~483）。

1865年10月20日（金）午後4時より

- | | | | |
|---|-----------|------------------------|---------|
| 1 | Overture | Merry wives of Windsor | Nicolai |
| 2 | Quadrille | Musen | Strauss |

- | | | | |
|---|--------------------|-------------|--------|
| 3 | Valse | Immortellen | Gung'l |
| 4 | Selection | Zampa | Herold |
| 5 | Galop | Iris | Faust |
| | God Save the Queen | | |

- | | | |
|----------|-----------------|--------|
| 1. 序曲 | 《ウィンザーの陽気な女房たち》 | ニコライ |
| 2. カドリール | 《ミューズの女神たち》 | シュトラウス |
| 3. ワルツ | 《不滅の作品群》 | グングル |
| 4. 抜粋 | 《ザンパ》 | エロール |
| 5. ギャロップ | 《虹》（もしくは《アイリス》） | ファウスト |
| | 《神よ、女王を守らせてまえ》 | |
- (JTDA, Vol. 1 No. 27, 1865/10/18、JTDA, Vol. 1 No. 28, 1865/10/19、JTDA, Vol. 1 No. 29, 1865/10/20)

1曲目は、オットー・カール・エーレンフリート・ニコライ Otto Carl Ehrenfried Nicolai (1810~1849) の歌劇《ウィンザーの陽気な女房たち》の序曲。現在でも演奏会で頻繁に取り上げられる曲である。ニコライは、ドイツ出身の作曲家兼指揮者で、1841年にウィーン帝室歌劇場（現、ウィーン国立歌劇場）首席指揮者に就任すると同時に、同楽団員による管弦楽演奏会を組織した。これが発展したものが、今日のウィーン・フィルである。したがって、ニコライはウィーン・フィルの初代指揮者に数えられる。《ウィンザーの陽気な女房たち》は、シェイクスピアの戯曲《ファルスタッフ》に基づく喜歌劇で、1849年に初演されたが、同年、ニコライは死去した。

2曲目に挙げられた《ミューズの女神たち》というカドリールは、父ヨハン・シュトラウス1世も、次男のヨーゼフ・シュトラウスも作曲しているが、この時演奏されたのはヨーゼフの作品（1858）ではないかと思われる。

3曲目の作曲者名は、この日の演奏会広告ではいずれも“Gung'l”と表記され、1866年4月6日の演奏会広告では“Gung L”と綴られているが、ハンガリーの作曲家ヨーゼフ・グングル Joseph Gungl (1810~1889) を指すと思われる。グングルは、ワルツなどの作曲家・演奏家としてブダペスト、ベルリン、ウィーンで活躍し、生前はヨハン・シュトラウス2世のライヴァルと目された。曲名の“Immortellen”というのは、辞書によると「ムギワラギク」（花が枯れても形や色が変わらないところから、この名称がある。本来は、ラテン語で「不滅のものども」を意味する）を指すが、この作品は、「ヨハン・シュトラウス1世の思い出に」という副題を持つから、父ヨハン・シュトラウスの「不滅の作品群」を意味するものと理解して、このように訳しておいた。

4曲目は、フランス初期ロマン派のオペレッタ作曲家ルイ・ジョゼフ・フェルデイナン・エロール Louis Joseph Ferdinand Hérold (1791~1833) の歌劇

《ザンパ》(1831)の抜粋。《ザンパ》は、日本でも早くから親しまれ、その一部はホーム・ミュージックにもなっている。

第5曲の作曲者ファウストについては先述した。曲名を《虹》と訳すべきか、植物の《アイリス》と訳すべきかは、これだけでは判断が付かない。

1865年10月27日(金)午後3時30分より

- | | | | |
|---|--------------------|--------------|-----------|
| 1 | Grand March | L'Africaine | Meyerbeer |
| 2 | Quadrille | Freikugeln | Voss |
| 3 | Valse | Fairy Palace | Boose |
| 4 | Selection | Anna Bolena | Donizetti |
| 5 | Galop | Foruard | Kuhner |
| | God Save the Queen | | |

1. 大行進曲 《アフリカの女》 マイヤーベア
2. カドリール 《魔弾》 フォス
3. ワルツ 《妖精の宮殿》 ボーゼ
4. 抜粋 《アンナ・ボレーナ》 ドニゼッティ
5. ギャロップ 《フォリュアール》? クーナー?

《神よ、女王を守らせたまえ》

(JTDA, Vol. 1 No. 33, 1865/10/25, JTDA, Vol. 1 No. 34, 1865/10/26, JTDA, Vol. 1 No. 35, 1865/10/27)

この日は、演奏開始時刻がさらに30分早まって、午後3時30分からとなっている。

1曲目には、マイヤーベアの遺作となった歌劇《アフリカの女》から「大行進曲」の演奏が予告されている。ヴァスコ・ダ・ガマを主人公とした大作オペラである。ただし、このオペラには「大行進曲」という曲はない。おそらくは第4幕で演奏される「インド人たちの行進」“Marche indienne”を指すものと思われる。

驚くべきは、その初演日である。この歌劇は、1865年4月28日に“Le Théâtre de l'Académie Impériale de Musique”、すなわちパリのオペラ座で初演されたことが総譜の表紙に記されている。その半年後に、その「大行進曲」が横浜で演奏されたことになる。パリでの初演から、総譜の作成、印刷、出版、総譜の積み出しと横浜への移送、横浜での荷揚げと軍楽隊編成用への編曲、練習、本番、という手順を考えると驚くべき早さである。この時点ではスエズ運河はまだ開通していなかったことを考え合わせると、なお一層驚かされる。この楽譜がアフリカの喜望峰周りで日本にもたらされたものか、エジプトのアレクサンドリアでいったん陸揚げされた後スエズまで鉄道で運ばれ、そこからさらに日本に向けて船で積み出されたものかは不明であるが、いずれにせよ、パリで初演された作品が半年後に日本で演奏されたことになる。当時の通航状況を考えると、この事実には驚くほかない。幕末の横浜はパリやロンドンの音楽界と直結していたともいえるし、当時の横浜には、パリやロンドンの音楽界とも見紛う「異世界」が出現していたともいえよう。

居留地や植民地に居住していた西洋人たちは、母国から切り離されて生活しているだけに、母国からの最新情報に、ことさら飢えていたものと思われる。そうした状況が、パリで初演されたマイヤーベアの最新作が半年後に横浜で演奏されるという現象を引き起こしたものと思われる。

なお、幕府から派遣されて文久2(1862)年にオランダに留学し、慶応3(1867)年に帰国した内田恒次郎(1838~1881)が持ち帰った写真集『万国写真帖』(東京国立博物館所蔵。全21巻)に、《アフリカの女》第3幕第1場、第4幕第1場、第5幕第1場を撮した舞台写真が各1枚ずつある(東京国立博物館(編)2000:312-313。図2~4)。初演時の舞台写真かどうかは未詳である。

第2曲については、未詳。

第3曲の作曲者名は、広告では“Boose”と記されているが、ドイツ出身の軍楽隊長カール・ボーゼ Carl Boosé (1815~1868)のことと思われる。ドイツで軍楽隊員として活躍した後、1835年にイギリスに渡り、いくつもの軍楽隊の隊長を務めた。ボーゼは、1845年から『ボーゼの軍楽隊ジャーナル』Boosé's Military Band Journalの刊行を開始し、多くの曲を軍楽隊用に編曲して紹介した。その際、ボーゼが楽器編成の手本としたのは、プロシャ陸軍軍楽隊の改革者ヴィープレヒト Wiprecht (1802~1872)が採用した編成であった。それまで、イギリスでは、軍楽隊の楽器編成は隊ごとに異なっていたが、ボーゼのこの『ジャーナル』の刊行により、イギリスの軍楽隊もプロシャ式の楽器編成に再編されるようになったという。

第4曲には、これまた大作であるドニゼッティのオペラ《アンナ・ボレーナ》(1830)からの抜粋が演奏されている。



図2



図 3



図 4

第5曲の作曲者ならびに作品については、未詳である。ただし、後に紹介する1866年5月11日の演奏会広告には、フーフナー Huhnerなる人物の《前進 Forward》というギャロップが挙げられている。これと同一の曲であれば、ここで曲名として挙げられた“Forward”は“Forward”の、作曲者名の“Kuhner”は“Huhner”の誤植の可能性がある。《前進》という題名は、軍楽隊で取り上げるのにふさわしい曲名のように思われる。さらに遡っていうならば、1865年9月30日の演奏会プログラムに掲載された“Kuhner”という作曲者名も、“Huhner”の誤植ではなかろうか。この辺りの事情に関しては、なおいっそうの調査が必要で

ある。

この1865年10月27日の演奏会を最後に、英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊の野外演奏会はしばらく休止となった。気温が低下して、野外演奏に不向きな季節となったことが原因と思われる。それに代わって、この後、「ジャパン・タイムズ・デイリー・アドヴァータイザー」紙や「ジャパン・タイムズ」紙には、横浜のロイヤル・オリムピック劇場での演劇上演の広告が毎週のように掲載されるようになった。そこには、幕間に英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊の演奏があることが予告されている（曲目は、記されていない）。冬の間、軍楽隊の活動は、屋内に移ったのである。

Ⅳ. 英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊演奏会 広告（1866年春シーズン）

1865（慶応元）年から1866（慶応2）年にかけての冬の間、「ジャパン・タイムズ・デイリー・アドヴァータイザー」（JTDA）紙や「ジャパン・タイムズ」（JT）紙には英国陸軍第20連隊第2大隊軍楽隊の野外演奏広告は見あたらない。この間、「ジャパン・タイムズ・デイリー・アドヴァータイザー」紙には何号か未発見の号があり、そこに野外演奏広告が掲載されていた可能性も考えられなくはないし、軍楽隊が演奏広告を取り止めたことも考えられるが、後に述べる理由から推して、野外演奏に不向きな冬の間、野外演奏会は行われなかったと考えるのが適当であろう。

同軍楽隊の野外演奏広告が次に新聞に登場するのは1866（慶応2）年4月に入ってからで、同年4月6日の演奏会を予告した以下のような記事からである。なお、この間に「ジャパン・タイムズ・デイリー・アドヴァータイザー」（JTDA）紙は、「ジャパン・タイムズ・デイリー・アドヴァータイザー・アンド・ヨコハマ・ベル」（JTDA & YB）紙と改称し、また第2刷 second editionも印刷されるようになった。

By permission of Colonel Browne and Officers, the Band of the XX Regiment will play on Friday Afternoons on the Bund, from 4 to 5 o'clock (weather permitting).

PROGRAMME

Friday, April, 6th 1866

- | | | | |
|---|--------------------|--------------------|---------|
| 1 | March | | |
| 2 | Overture | Crown Diamonds | Auber |
| 3 | Quadrille | Chansonetten | Strauss |
| 4 | Selection | Puritan's Daughter | Balfe |
| 5 | Valse | Soldaten Lieder | Gung L |
| 6 | Galop | Charlotten | Berger |
| | God Save the Queen | | |

A. HENNESSY, Conductor

ブラウン大佐ならびに士官の方々のご許可により、第20連隊軍楽隊は、毎週金曜日の午後4時から5時まで、横浜海岸通りで演奏を行います（天候が許す限り）。

プログラム

1866年4月6日金曜日

1. 行進曲
2. 序曲 《王冠のダイヤモンド》 オーバー
3. カドリール 《シャンソネッテン》 シュトラウス
4. 抜粋 《清教徒の娘》 バルフ
5. ワルツ 《兵士の歌》 ゲングル
6. ギャロップ 《シャルロット》 ベルガー
《神よ、女王を守らせたまえ》

A. ヘネシー、指揮者

(JTDA & YB, Vol. 1 No. 156, 1866/4/4、同second edition、JTDA & YB, Vol. 1 No. 157, 1866/4/5、同second edition、JTDA & YB, Vol. 1 No. 159, 1866/4/7)

ブラウン大佐の名前は、JTDA & YB, Vol. 1 No. 156, 1866/4/4の初刷りでは“Brown”と印刷されたが、同日付の第2刷以降、“Browne”と訂正された。

この広告では、“on Friday Afternoons”と、複数形を用いて、「毎週金曜日」に演奏会を行う旨が記されている。そこから、この広告は、4月6日の演奏会の広告と、野外演奏会の再開を告げる宣伝とを兼ねたものと見ることができる。1865年から1866年にかけての冬の間、この演奏会以前には野外演奏会が行われなかったと考える理由の一つは、この点にある。また、この広告が、演奏会翌日の4月7日付の「ジャパン・タイムズ・デیلیー・アドヴァータイザー・アンド・ヨコハマ・ベル」(JTDA & YB)紙の第159号にも掲載された理由は、この広告が以後の演奏会の予告を兼ねたものであったからであろう。

この記録から、演奏時間は1時間が予定されていたことが分かる。前年秋の演奏会広告には開始時間しか記されておらず、演奏時間がどの程度であったかは不明であったが、この記録と前年秋の演奏会プログラムとの比較から、前年秋の演奏会もやはり1時間程度の演奏であったことが推察される。

1曲目の「行進曲」は曲名が記されていない。以後の演奏広告も同様である。おそらく、軍楽隊は、「行進曲」を演奏しながら演奏場所に到着し、それから第2曲以下の演奏を開始したのであろう。行進曲の曲名が記されていないのは、そのためと考えられる。

2曲目は、オーバーの歌劇《王冠のダイヤ Les Diamants de la Couronne》(1841)の序曲。冒頭の序奏部分は、日本でもよく知られている。

3曲目のカドリール《シャンソネッテン》は、「ワルツ王」ヨハン・シュトラウス2世の作品(1861)で、彼のロシア滞在中に作曲された曲である。ヨハン・シュトラウス2世は、1856年から1865年までと1869年および1886年の夏の間(おおよそ5月初旬から10月初頭まで)、当時のロシアの首都サンクト・ペテルブルク南郊のパヴロフスクに滞在し、同地の「音楽駅」で連日のように演奏を行った(加藤 2003:115-128)。ここは、ペテルブルク近郊の夏の避暑地で、近くにはパ

ヴロフスク宮殿があり、ロシア皇帝の夏の離宮であるツァールスコエ・セロのエカテリーナ宮殿も遠くない。彼の《トリッチ・トラッチ・ポルカ》、《常動曲》、ポルカ《観光列車》、ポルカ《クラップフェンフェルトの森》などは、彼のパヴロフスク滞在中に、もしくはパヴロフスクでの演奏会用に作曲されたものという(加藤 2003:121-123)。現在、パヴロフスク駅(かつての「音楽駅」)の駅前にヨハン・シュトラウス2世の銅像が建っているのは、そのためである。カドリール《シャンソネッテン》は、同じくパヴロフスクでの演奏会に招かれて人気を博したパリの女性合唱団の歌うコミカル・ソングの旋律を繋ぎ合わせたものという。

なお、「岩倉使節団」は、1872(明治5)年の6月18日と6月19日の両日、ボストンで、ヨハン・シュトラウス2世自身が指揮する彼のワルツを聴いている(中村洪介 1987/2002:72-79)。一行が6月18日に聴いたのはワルツ《酒、女、歌》であったことが当日のプログラムから分かるが、19日に聴いたのがどの曲であったかは、プログラムに記されていないため、不明である。

4曲目は、バルフの歌劇《清教徒の娘》(1861)の抜粋。

5曲目の作曲者ゲングルについては、先述した。彼の名前は“Gungl”と綴るのが正しいが、この広告では“Gungl”と綴られている。

6曲目の作曲者ならびに作品については、未詳である。

この演奏会の翌日、第20連隊第2大隊軍楽隊と同大隊のアマチュア・グリー・クラブの合同演奏会が、横浜のロイヤル・オリンピック劇場で行われた。野外演奏会ではないが、その演奏会の広告も紹介しておこう。

CONCERT

By permission of Colonel H. R. Browne and Officers, the Band and Amateur Glee Club of the 2nd Battalion, XX Regt., will give a Vocal and Instrumental Concert, on Saturday, the 7th day of April, 1866, at the Royal Olympic Theatre.

PROGRAMME

Part I

- | | | | |
|---|--------------------------|---------------------------------|-----------|
| 1 | Overture | Guillaume Tell | Rossini |
| 2 | Glee | The Witches' Glee | King |
| 3 | Song | The Dream of Youth | Juchos |
| 4 | Glee | The Wreath | Mazzinghi |
| 5 | Morceau obligato, Cornet | | Suppe |
| 6 | Song | Day and night I thought of thee | Shrivall |
| 7 | Glee | The Red Cross Knight | Callcott |

Part II

- | | | | |
|---|-----------|----------|--------|
| 1 | Selection | Ruy Blas | Glover |
|---|-----------|----------|--------|

- | | | | |
|---|-------------------------------------|---------------------------|-----------|
| 2 | Gree | Winds Gently Whisper | Whittaker |
| 3 | Song | Louie Lee | Griffin |
| 4 | Glee | Mynheer Van dunk | Bishop |
| 5 | Swiss Air with Variations, Clarinet | Brespant | |
| 6 | Serenade | Stars of the Summer night | Hatton |

God Save the Queen

Doors open at 8-30, Concert to commence at 9 P.M. precisely.

Admission	Reserved Seats	\$2.00
	Unreserved Seats	1.00

Tickets to be obtained at the Yokohama United Club, and at the Officers' Mess 2nd Btn., XX Regt.

A. Hennessy

Conductor of Instrumental Music

Geo. Young

Conductor of Vocal Music

Holders of Tickets are requested to take possession of their seats at least five minutes prior to the commencement of the Overture.

Vivat Regina

H. R. ブラウン大佐と士官の方々の御許可により、第20連隊第2大隊軍楽隊とアマチュア・グリーン・クラブは、声楽・器楽演奏会を1866年4月7日土曜日にロイヤル・オリンピック劇場で開催します。

プログラム

第1部

- | | | | |
|----|------------------|---------------|--------|
| 1. | 序曲 | 《ウィリアム・テル》 | ロッシーニ |
| 2. | 合唱 | 《魔女たちの合唱》 | キング |
| 3. | 歌 | 《若き日の夢》 | ユッホス |
| 4. | 合唱 | 《花環》 | マッツィンギ |
| 5. | オブリガート付き楽曲、コルネット | | スッペ |
| 6. | 歌 | 《昼も夜も我は汝を思わん》 | シュリヴァル |
| 7. | 合唱 | 《赤い十字の騎士》 | コールコット |

第2部

- | | | | |
|----|-------------------|----------------------------|--------|
| 1. | 抜粋 | 《レイ・ブラス》 | グローヴァー |
| 2. | 合唱 | 《風は静かにささやく》 | ホイッタカー |
| 3. | 歌 | 《ルイ・リー》 | グリフィン |
| 4. | 合唱 | 《ファン・ドゥンク氏》 | ピショップ |
| 5. | スイス民謡、変奏付き、クラリネット | | プレスパン |
| 6. | セレナーデ | 《夏の夜の星々》
《神よ、女王を守らせたまえ》 | ハットン |

8時30分開場、9時ちょうど開演。

指定席 2ドル

自由席 1ドル

チケットは、横浜ユナイテッド・クラブならびに第20連隊第2大隊士官食堂で入手可能。

A. ヘネシー
器楽指揮者
Geo. ヤング
声楽指揮者

チケット保有者は、遅くとも序曲開始の5分前までに着席をお願いします。

女王陛下、万歳！

(JTDA & YB, Vol. 1No. 155, second edition, 1866/4/3、JTDA & YB, Vol. 1 No. 156, 1866/4/4、JTDA & YB, Vol. 1No.157, 1866/4/5、同second edition、JT, No. 30, 1866/4/6、JTDA & YB, Vol. 1 No. 159, 1866/4/7)

実は、この時すでに、第20連隊第2大隊は、第9連隊第2大隊との交替が決まっていた。第9連隊第2大隊の左翼はすでに3月30日に横浜に到着しており、第20連隊第2大隊の約半数にあたる左翼は、翌週、4月11日に香港に向けて移動した。この演奏会は、「お別れ演奏」の意を込めて開催されたものらしい。

広告文中、ブラウン大佐の名前は、JTDA & YB, Vol. 1 No. 155, second edition, 1866/4/3では“Brown”と綴られていたが、後の版では“Browne”と訂正された。

会場となった「ロイヤル・オリンピック劇場」は、横浜居留地102番（現、横浜市中区山下町102番地）にあった建物で、曲馬団を率いて1864（元治元）年に来日した興行師・軽業師のリチャード・リーズリーが所有していた建物である。現在、横浜中華街の新名所「横浜大世界」の一郭となっている。

プログラム第1部第1曲に挙げられたロッシーニの《ウィリアム・テル》序曲は、どの版でも、“Guillaume Tell”と綴られている。正しくは、“Guillaume Tell”である。

第2曲は、数多くのコミック・オペラやグリー作品で知られるマシュー・ピーター・キング Matthew Peter King (1773頃～1823) の作品（1800頃）。歌詞は、トマス・ミドルトンの悲喜劇『魔女』第3幕第3場に記されているほか、シェイクスピアの『マクベス』第3幕第5場にもその歌を舞台裏で歌うよう指示がある。

第3曲の作曲者名は、JTDA & YB, Vol. 1No. 155, second edition, 1866/4/3では“Juchs”と綴られていたが、以後の版では“Juchos”と訂正された。

第4曲の作曲者名は、JTDA & YB, Vol. 1 No. 155, second edition, 1866/4/3では“Pazzinghis”と綴られていたが、後の版では“Mazzinghi”と訂正された。ジョゼフ・マッツィンギ Joseph Mazzinghi (1765～1844) は、ロンドンで活躍したイタリア系ピアニスト、指揮者、作曲家である。

第5曲は、スッペの楽曲のどれかをコルネットの独奏付きで演奏したものであろう。フランツ・フォン・スッペ Franz von Suppé (1819～1895) は、いうまでもなく、オーストリアを代表するオペレッタ作曲家

の一人。代表作は《美しきガラテア》(1865)、《軽騎兵》(1866)などであるが、演奏年代から考えて、この時演奏された曲が《軽騎兵》《ボッカッチョ》(1879)、《パリジェンヌたち》(1898)でないことは確実である。

第6曲のシュリヴァルの《昼も夜も我は汝を思わん》は未詳。

第7曲は、合唱曲作曲家として知られるジョン・ウォール・コールコット John Wall Callcott (1766～1821)の作品。“Red Cross”は、ナイチンゲールが創設した「赤十字」のことではなく、白地に赤の「聖ジョージ十字章」(イギリスの国章)のことであろう。

第2部の第1曲は、ウィリアム・ハワード・グローヴァー William Howard Glover (1819～1875)の歌劇《ルイ・プラス》(1861)の抜粋。

第2曲の作曲者ホイッタカーは未詳。ただし、《ホーム・スイート・ホーム Home Sweet Home》(「植生の宿」)。本来は、1822年に初演された歌劇《クラリ》の中のアリアで知られるサー・ヘンリー・ロウリー・ビショップ Sir Henry Rowley Bishop (1786～1855)の音楽劇《退屈なやつ、またはジプシーの予言 Guy Mannering, or Gypsy's prophecy》(1816)はホイッタカーとの連名で発表されており、この合唱曲もそのホイッタカーの作品であるかもしれない。

第3曲の作曲者グリフィン、ジョージ・ユージン・グリフィン George Eugene Griffin (1781～1863)のことであろうか。

第4曲が、先述のビショップの作品かどうかは、ビショップの作品目録にあたる機会にまだ恵まれていないので、現在の段階では未詳である。曲名中の“Mynheer”は、英語の「ミスター」にあたるオランダ語の敬称(“mijnheer”もしくは“meneer”)。この敬称に続く部分は、掲載広告のいずれの版でも“Van dunk”となっているが、固有名詞であるならば、“Van Dunk”と大文字で綴るのが正しいであろう。

第5曲の作曲者プレスパンは未詳。“Clarionet”は、クラリネットのことであるが、19世紀の文献にはしばしばこの綴りを見掛ける。

第6曲の《夏の夜の星々》は、ジョン・リプトロット・ハットン John Liptrot Hatton (1808～1886)の作品。ハットンについては、1865年10月6日の演奏会の項で一度触れた。

最後に英国国歌の演奏で会を終了することが予告されている。

料金の「指定席2ドル」「自由席1ドル」というのは、当時、横浜で共通貨幣として通用していたメキシコ・ドルのことをいうものであろうか。

チケットの入手先として挙げられている「横浜ユニテッド・クラブ」は、横浜居留地5番(現、神奈川県民ホールの一郭)にあったクラブである。「ヨコハマ」の部分は、JTDA & YB, Vol. 1 No. 155, second edition, 1866/4/3では“Yokoham”と綴られていたが、後の版では“Yokohama”と訂正された。“Mess”という

のは、“mess hall”(「食堂」)のことである。

最後に、この広告の掲載主として、軍楽隊の指揮者「A. ヘネシー」と合唱指揮者「Geo. [ジョージカ]・ヤング」の名前が挙げられている。

この演奏会の後、第20連隊第2大隊のおよそ半数は香港に移動したが、軍楽隊は後発隊として残ったようで、その後も、野外演奏会を続けている。演奏会広告の文面は、1866年4月6日の演奏会のものとほとんど同じなので、以下、日時と曲目のみ紹介する。会場は、やはり、「横浜海岸通り」である。

1866年4月20日(金)午後4時より

- | | | | |
|---|--------------------|-----------------------|---------|
| 1 | March | | |
| 2 | Overture | The Barber of Seville | Rossini |
| 3 | Quadrille | Herold | Strauss |
| 4 | Selection | Le Paux Clercs | Hergld |
| 5 | Valse | Comet | Lanner |
| 6 | Gallop | Feldpost Relais | Piefke |
| | God Save the Queen | | |

1. 行進曲
2. 序曲 《セヴィリヤの理髪師》 ロッシーニ
3. カドリール 《ヘロルド》 シュトラウス
4. 抜粋 《?》 ?
5. ワルツ 《彗星》 ランナー
6. ギャロップ 《軍事郵便網》 ピーフケ
《神よ、女王を守らせたまえ》
(JTDA & YB, Vol. 1 No. 167, 1866/4/19)

2曲目のロッシーニの名前は、“Rosini”と綴られている。

3曲目は、ヨーゼフ・シュトラウスの作品(1864)。

4曲目は、この行の印刷が悪く、曲名・作曲者名ともよく読み取れない。読み取った結果を上記のように記しておいたが、この綴りが正しいかどうかは不明である。あいにく、この日の演奏広告を載せた他の号は未発見であるため、確認ができない。この時期のJTDA & YB紙・JT紙の残存状況が悪いのが残念である。

第5曲の作曲者は、父ヨハン・シュトラウス1世のかつての同僚であり、後にライヴァルともなったワルツ作曲家ヨーゼフ・ランナー Joseph Lanner (1801～1843)の作品(1834。作品87)。1835年にハレー彗星がまた現れることが予告されており、ウィーンでは、前年から、「また、何かよくないことが起きるのではないか」との噂が飛び交っていた。それを当て込んで作曲された作品という(Krenn 1994: 55)。

第6曲の作曲者ピーフケは、ドイツのフランクフルト・アン・デア・オーダー駐屯親衛擲弾兵第8連隊軍楽隊長であったゴットフリート・ピーフケ Gottfried Piefke (1815～1884)を指すと思われる。

4月27日の演奏会の広告は、以下の通りである。

1866年4月27日（金）午後4時より

- | | | | |
|---|-----------|------------------------|---------|
| 1 | March | | |
| 2 | Overture | The Barber of Seville | Rossini |
| 3 | Quadrille | Herold | Strauss |
| 4 | Selection | Les Vêpres Siciliennes | Verdi |
| 5 | Valse | Comet | Lanner |
| 6 | Galop | Sleight | Huhner |
| | | God Save the Queen | |

1. 行進曲
2. 序曲 《セヴィリヤの理髪師》 ロッシーニ
3. カドリール 《ヘロルド》 シュトラウス
4. 抜粋 《シチリアの晩祷》 ヴェルディ
5. ワルツ 《彗星》 ランナー
6. ギャロップ 《軍略》 フーフナー

《神よ、女王を守らせたまえ》

(JTDA & YB, Vol. 1 No. 172, 1866/4/25, second edition, JTDA & YB, Vol. 1 No. 173, 1866/4/26)

一見して分かるように、前週の演奏会と第2曲、第3曲、第5曲の曲目が同じであり、新たにプログラムに加えられた曲は第4曲と第6曲だけである。離日前の慌たらしさを想像させるプログラムである。

同じ慌たらしさは、この頃から広告に誤植が増えることから感じられる。2曲目の作曲者名は、どちらの版でも“Rosini”と綴られているし、第6曲の曲名は、どちらの版でも“Sleight”と綴られている（正しくは、“Sleight”）。

4曲目のヴェルディのフランス語オペラ《シチリアの晩祷》は、1855年にパリのオペラ座で初演された作品。

第6曲の作曲者フーフナーに関しては、1865年10月27日の演奏会広告の項、ならびに1866年5月11日の演奏会広告の項を参照されたい。曲名の“Sleight”とは、「術策」「手練手管」「手品」の意味であるが、1866年5月11日の演奏会ではこの作曲家の《前進Forward》という、いかにも軍楽らしい曲名が演奏されているので、ここでは《軍略》と訳してみた。

次週の演奏会プログラムは、以下の通りである。

1866年5月4日（金）午後4時より

- | | | | |
|---|-----------|------------------------|---------|
| 1 | March | | |
| 2 | Overture | The Barber of Seville | Rossini |
| 3 | Quadrille | Herold | Strauss |
| 4 | Selection | Les Vêpres Siciliennes | Verdi |
| 5 | Valse | Comet | Lanner |
| 6 | Galop | Sleight | Huhner |
| | | God Save the Queen | |

(JTDA & YB, Vol. 1 No. 177, 1866/5/2, second edition, およびJTDA & YB, Vol. 1 No. 178, 1866/5/3)

一見して明らかなように、この日のプログラムは、前週の4月27日のプログラムと全く同一である。4月27日の演奏会が雨のために流れたために、前週のプログラムを繰り返したものと思われる。相州三浦郡大田和村の浅葉家の『浜浅葉日記』によれば、当日の天候は「大南ニ而陰、少々つつ雨降〔南寄りの風強く、曇り、時々雨〕」と記されているという⁶。

ロッシーニの名前を“Rosini”に、第6曲の題名を“Sleight”と誤植している点は、前回の演奏会広告と全く同じである。

この時期、「ジャパン・タイムズ・ディリー・アドヴァータイザー・アンド・ヨコハマ・ベル」紙の編集部で混乱が起きていることは、演奏会広告に誤植が多いことから明らかである。5月2日号（JTDA & YB, Vol. 1 No. 177, 1866/5/2, second edition）の広告では、演奏会の日付を「来る7日、金曜日“on Friday the 7th instant”」「1866年4月7日、金曜日“Friday, April, 7th, 1866”」と誤っている（正しくは、5月4日、金曜日）。前者は、5月3日号（JTDA & YB, Vol. 1 No. 178, 1866/5/3）で「来る4日、金曜日“on Friday the 4th instant”」と訂正されたが、後者は、「1866年4月4日、金曜日“Friday, April, 4th, 1866”」と、月を間違えている。5月3日号は、自紙の発行日も「1866年5月3日、水曜日“Wednesday, May, 3rd, 1866”」と誤る体たらくである（正しくは、「木曜日」）。第20連隊第2大隊の撤退に伴って、腕のよい植字工がいなくなったか何か、ともかく、「ジャパン・タイムズ・ディリー・アドヴァータイザー・アンド・ヨコハマ・ベル」紙の編集部内に大きな混乱が起っていた様子が伝わってくる。

5月11日の演奏会プログラムは以下のようであった。

1866年5月11日（金）午後4時より

- | | | | |
|---|-----------|------------------------|-----------|
| 1 | March | | |
| 2 | Cavatina | Belisario | Donizetti |
| 3 | Quadrille | Campbell Minstrels | D'Albert |
| 4 | Selection | I Montecchi E Capuleti | Bellini |
| 5 | Valse | Claribel | Coote |
| 6 | Galop | Forward | Huhner |
| | | God Save the Queen | |

1. 行進曲
2. カヴァティーナ 《ベリサリオ》 ドニゼッティ
3. カドリール 《キャンパベル・ミンストレイズ》
ダルベール
4. 抜粋 《カプレッティ家とモンテッキ家》
ベッリーニ
5. ワルツ 《クラリベル》 クート
6. ギャロップ 《前進》 フーフナー

6 放送大学元大学院生、大出鍋蔵氏の教示による。

《神よ、女王を守らせたまえ》

(JTDA & YB, Vol. 1 No. 183, 1866/5/9, second edition, JTDA & YB, Vol. 1 No. 184, 1866/5/10、および同second edition)

2曲目のドニゼッティの歌劇《ベリサリオ》は、1836年の作品。当日は、その中からカヴァティーナが演奏されたようである。

3曲目のダルベールの《キャンプベル・ミンストレルズ》は、1865年9月15日の演奏会広告では、《キャンプベル・ミンストレル》と、単数形で書かれている。

4曲目は、ドニゼッティとならぶ初期ロマン派のイタリア・オペラの大立て者のヴィンチェンツォ・ペッリーニ (1801~1835) の作品 (1830)。シェイクスピアの《ロミオとジュリエット》に基づくオペラで、現在でも世界中の歌劇場で演奏されている。演奏会広告には“I Montecchi E Capuleti”と書かれているが、正しくは、“I Capuletti e i Montecchi”である。

第5曲の作曲者は、作曲家で軍楽隊長も務めたチャールズ・クート Charles Coote (1809~1880) のことであろう。曲名の《クラリベル》であるが、当時、「クラリベル」という愛称の女性歌曲作曲家 (チャールズ・バーナード Charles Barnard夫人。旧姓シャルロッテ・アリントン Charlotte Alington [1830~1869]) がいた。この女性と何か関係があるのかもしれない。

第6曲の作曲者フーフナーについては、すでに再三述べた。

この広告でも、演奏会の日付が「1866年4月11日、金曜日“Friday, April, 11th, 1866”」と誤植されている。正しくは、「5月11日」である。

ともあれ、この演奏会を最後に、軍楽隊を含む第20連隊第2大隊の残留部隊は横浜を退去した。その跡を継いで横浜に駐留したのは、英国陸軍第9連隊第2大隊であった。

(以下、次号)

参考文献

アンペール

1969 『アンペール 幕末日本図絵』(上) 高橋邦太郎 訳 東京：雄松堂出版。

1970 『アンペール 幕末日本図絵』(下) 高橋邦太郎 訳 東京：雄松堂出版。

石塚裕道

1999 「横浜英仏駐屯軍の十二年間—外国人居留地をめぐる“軍事空間”—」横浜対外関係史研究会；横浜開港資料館 (編) 1999：3-75。

大山瑞代

1999 「横浜駐屯地の英国陸軍——史料に見る兵士たちの生活社会史——」横浜対外関係史研究会；横浜開港

資料館 (編) 1999：79-116。

影山好一郎

1999 「横浜外国人居留地の防衛—英国の軍事力行使をめぐる—」横浜対外関係史研究会；横浜開港資料館 (編) 1999：150-182。

加藤雅彦

2003 『ウィンナ・ワルツ ハプスブルク帝国の遺産』東京：日本放送出版協会 (NHKブックス)。

デーヴィス

1993 「第20連隊軍楽隊員デーヴィスの手記」大山瑞代 訳 横浜開港資料館1993：99-102。

東京国立博物館 (編)

2000 『東京国立博物館所蔵 幕末明治期写真資料目録』2—図版篇— 東京：国書刊行会。

中武香奈美

1994 「幕末維新期の横浜英仏駐屯軍の実態とその影響——イギリス軍を中心に——」『横浜開港資料館紀要』12：1-32。

1996 「幕末の横浜駐屯フランス陸軍部隊」『横浜開港資料館紀要』14：42-71。

1999 「フランス海軍と駐日公使ロッシュの対日政策—下関遠征後の横浜フランス駐屯軍をめぐる—」横浜対外関係史研究会；横浜開港資料館 (編) 1999：339-366。

中村洪介

1987/2002 (新装版) 『西洋の音、日本の耳』東京：春秋社。

中村洪介 (著)；林淑姫 (監修)

2003 『近代日本洋楽史序説』東京：東京書籍。

升本匡彦

1986 『横浜ゲート座—明治・大正の西洋劇場—』(第2版) 横浜：岩崎博物館 (ゲート座記念) 出版局。

柳生悦子

1999 「下関戦争と英国海兵隊—『海でも陸でも』戦う士官たち—」横浜対外関係史研究会；横浜開港資料館 (編) 1999：117-149。

横浜開港資料館 (編)

1988 『横浜もののはじめ考』横浜：横浜開港資料普及協会。

1993 『史料でたどる 明治維新期の横浜英仏駐屯軍』横浜：横浜開港資料普及協会。

1998 『図説 横浜外国人居留地』横浜：有隣堂。

2006 『F. ベアト写真集2』東京：明石書店。

横浜開港資料館；横浜居留地研究会 (編)

1996 『横浜居留地と異文化交流』東京：山川出版社。

横浜対外関係史研究会；横浜開港資料館 (編)

1999 『横浜英仏駐屯軍と外国人居留地』東京：東京堂出版。

Brown, James D.; Stratton, Stephen S.

1897 *British Musical Biography, A Dictionary of Musical Artists, Authors and Composers Born in Britain and Its Colonies*, London, repr. 1971, New York: Da Capo Press.

Krenn, Herbert

1994 “*Lenz-Blüthen*”, *Joseph Lanner, Sein Leben—sein Werk*, Wien; Köln; Weimar: Böhlau Verlag.

(平成18年10月21日受理)